



Slow Food®

エディ・ムキビ：貧しい暮らしからスローフードへ～私の旅路

私は、ウガンダのビクトリア湖北岸に住む比較的大きな家族のもとに生まれました。この地域の他の多くの低所得世帯と同様に、私たちの主な生計手段は小さな土地での混農で、私たち自身の食料もほとんどそれでまかなっていました。私はすぐに農業と食糧生産の重要性を学び、母や兄弟と一緒に庭に行くのが大好きでした。多種多様な作物を育てていたおかげで、毎回何か収穫があり、同時に何かを植えることができたからです。

一方、学校では、遅刻したり、英語ではなく現地の言葉を話したりすると、農作業が罰則の対象になることが多くなっていました。家での毎朝の仕事と、地元の言葉への強い思い入れから、私は必然的に学校の菜園にもよく行くことになりました。やがて私は先生たちに、ガーデニングを罰ではなく、生徒たちが食べ物を育てる方法を学ぶための重要な活動としてやらせてほしいと説得するようになりました。クラスメートに技術を教え、農業に否定的な態度をとっている彼らに思い直してほしいと思ったのです。したかったのです。もちろん、学校には無視されましたが、私はいつか農業が罰として使われるのを止めるために何かしよう、と心に誓いました。

2006年、カンパラのマケレレ大学に入学した私は、DISC (Developing Innovations in School Cultivation) プロジェクトを立ち上げ、学校やコミュニティと協力して、農業を罰としてではなく、興味深く、生産的な学習活動となるように取り組みました。この成功体験をより広めたいという思いから、私は農学部でリーダーを務めました。そして、大学在学中に、私のキャリアで最悪の経験をしたのです。それは同時に、私がアグリフードシステムに関して重要な決断を下す大きな転機となりました。

農学部でとても精力的に活動していた私は、キャンクワンジ地区でハイブリッド・トウモロコシの種子を普及させるプロジェクトに参加する機会を得ました。このハイブリッド・トウモロコシは干ばつに強いとされており、私はチームと一緒に、このトウモロコシを栽培して収量を上げる方法を農民に広め、啓蒙しました。この高い収量は、推奨されるすべての合成投入物を使用した場合にのみ得られるものです。農民は常に厳しい気候に打ち勝つ方法を模索しているため、多くの農民が栽培シーズンに向けて種子や投入資材を入手し、この新品種を植える準備をしました。この新品種は、従来の間作やアグロフォレストリー・システムを使わずに、単一栽培で植えると最もうまくいくのです。

しかし、2007年の最初の栽培シーズンの初めに早魃が発生し、広大な土地をトウモロコシだけに割り当てていた農家は損失を被りました。私は、検証、評価、支援を行うために、農家に会いに行きましたが、このシステムがコミュニティにもたらした被害の大きさに愕然としました。彼らと話すうちに、彼らの失望、いら立ち、不安が伝わってきました。飢餓や貧困、栄養失調などの不公正をなくす

には、どの生産方式がアフリカのコミュニティにとって本当に有効なのか、改めて考えるきっかけになりました。農家の人たちに謝罪し、共感する中で、地域の資源や知識、伝統的な多様な農法に基づいた地域システムを、彼らと共に再構築していきたいと考えるようになりました。つまり、地域のシステムを再生し、かつて存在したのと同じくらいレジリエンス（回復力）に富んだものにするのです。

私は、この活動にコミットすることを誓いました。当時、私は持続可能な食糧システムについての知識があまりなかったのですが、幼少期に家族で営んでいた小さな農場での経験が、私が選んだ道を進む後押しをしてくれました。私は、資金力のある、将来も保証されている、アグリビジネスのソリューション開発の仕事を辞めました。地域のソリューションにはならないどころか、より多くの痛みや苦しみを生むことがわかったからです。私は、地域の生態系に基づいた伝統的な農業システムを再構築する方法について、より多くの知識を求めて学び始めました。そして、数人の農民とトレーニングセッションを開催し始め、地域の生態系と種、循環する投入物や資源に基づいた、伝統的なアフリカの農業システムを再構築するために立ち上がりました。

最も重要なことは、この知識を、私が作り、積極的に活動していた学校菜園に取り入れるようになったことです。大変な作業でしたが、次第に私の考えに賛同してくれる他の生徒たちと協力するようになり、コミュニティラジオの活用など、地域内コミュニケーションの革新的な方法を思いつくようになりました。そして、同じように多様性や地域の資源、知識に基づいたフードシステムの再構築に関心を持ち、同じ方向に進むコミュニティと協働する人々や組織、また私が学校で行っていた教育プロジェクトとつながりのある人々を探し始めました。私はこのインスピレーションと経験をインターネット上の学習プラットフォームで共有し、それがきっかけでスローフードが私を見つけてくれたのです。このような問題に関心を持つ人が他にもいること、大きな勢力に対して自分一人でやっているのではないことを知ったとき、大きな安堵感を覚えました。スローフード運動やテッラ・マードレのネットワークとの最初の出会いで忘れられないのは、テッラ・マードレ 2008 に招待されたときです。この喜び、学び、ネットワーク作り、刺激、再生の体験は、帰国して、より広く、より効果的で強力なネットワークを作り、おいしい、きれい、ただしいフードシステムのための運動に参加するための力を私に与えてくれたのです。これこそ、テッラ・マードレの衝撃的な感情なのです。

私の話を振り返ってみると、スローフードの理念を体現し、活動に息を吹き込んでいる農家や職人、その他草の根の活動家の中には、質素な出自の農村の人々がたくさんいることに気づきます。このような多様性、熱意、創造性を継続的に私たちのムーブメントに受け入れる方法を見出すことこそ、多様な知識、スキル、経験の豊かさがフィードされ、ローカルな活動を私たちのグローバルな運動へと豊かにしていくことができるのです。7月以降に採用される参加型財団モデルは、社会的、地理的な境界を破り、より開かれた、包括的なアプローチを持つための構造です。これは私たちが意見を交わした結果であり、私たちが世界各地のコンビビウムやコミュニティのメンバーからなる真の草の根運動であることを改めて確認することができました。そしてこの連帯は、一連の危機と不正に代表されるフードシステムの複雑な欠点に立ち向かい、挑戦するために不可欠な力を与えてくれるでしょう。今後、より多くの労力と資源を割いて、リーダーや活動家を養成し、より多くのコミュニティに門戸を開き、コンビビウムの会員基盤を構築していくことが重要です。によって、この相互に結びついた草の根ネットワークを強化し、成長させるために、より多くの努力と資源を投入することが重要です。また、私たちと同じ道を歩んでいる人たちとのコラボレーションに門戸を開き、心を開いて、アドボカシー・アライアンスやその他のパートナーシップを構築することも重要です。

今こそ、社会的、地理的なバブルから一步踏み出して、おいしい、きれい、ただしいフードシステムという同じビジョンを持つ人々や、地球の再生に取り組んでいる人々とつながりを持たなければならない時が来ているのです。このようにネットワークの内外で相互接続することで、最初は不完全に見えるかもしれないモザイクができあがります。しかし、最終的にはこのモザイクの小さなピースがすべて一緒になって、カタツムリの強いイメージを作り上げ、世界のあらゆる場所ではっきりと目に見え、強く存在するものになるのです。叡智と行動を通して、テッラ・マードレは私たちをひとつにまとめ、草の根の強さを定義しているのです。

今回の変化は、私たちのプロジェクトや活動において、アイデアを相互に交換するための土壌であるテーマ別ネットワークの発展にも非常に重要です。複雑に聞こえるかもしれませんが、「行動への呼びかけ」を指針とし、オープンで包括的な組織構造を採用することで、おいしい、きれい、ただしいフードシステムに向けた私たちの道は、より明確なものになると確信しています。

私たちは、共にあることで、強くなれるのです。